

# サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

Division C1:第 1回ジャーナル

## “アイドル / 偶像 ”

Written by 美神弘貴



お知らせ :このページ (ジャーナル表紙)に入るイラストをイラスト投稿掲示板にて募集中。

# サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

## 姿

とある日の光星デパート、そのデパートの中にあるCDショップにて、イベントが行われていた。

CDショップでのイベント、と言えば聞こえが良いが、要は営業である。

しかし、近年の「営業」は以前にあるような演歌歌手のどさ回りのな味な印象はなく、むしろ「ファンとの距離を縮められる」という事から、比較的若いアイドル・アーティストも積極的にやっている。最近の言葉で言えば、「インストア・イベント」である。

そのイベント会場でもある、デパートの屋上に設営されたステージの前に並んでいるパイプ椅子の最前列のほぼ真ん中に。

「優ちゃん、まだ来てないのかな？」

そう言うのは、鋼達彦。

達彦の隣では、人の多い雰囲気に着ち着かないのが、頻りに辺りをキョロキョロしている久保田香織が居る。

今日は、このCDショップに今年デビューしたばかりの新人ユニット「レピッシュ」のヴォーカルが来るのである。

そのヴォーカルが先程から出ている「優ちゃん」である。

しかし、素性等は一切不明。「優ちゃん」と言っているのも、アーティスト名は「ユウ」とだけ出ている。

以前に音楽雑誌のインタビューの時に、本人がポロッと言った一言が「客前の中に「優」って入って、その時が好きなんです」と言っただけである。

何せ、年齢や出身地、本名も公表されていないし、それ以上に、中世的な外見の為、性別論争まで巻き起こっている。

おそらく、年齢は達彦や香織と同じくらいと思われる。

CDやインタビューで聞く声に幼さを感じるからであるが、この年齢では見た目を整えれば確かに男か女が見分けは付かない。

「はい、えーっと、それでは、これからユウさんをお迎えしてのイベントを行います!!」

あまり上手くない司会進行ーおそらくこの店の店員であるルーでイベントが始まった。

達彦達の前にある、簡単に作られた、決して豪華とは言えないステージに現れたのは、たっ

た一人だけであった。確か誰い文句では「ユニット」だった筈である。しかし、その事を知っているファンの疑問をそのまま置き去りにするが如く、レピッシュの新曲のイントロがスピーカーから流れ出す。

「非常に聴きやすい歌声ですよ」

達彦はそう言う、事前に買ってあった缶のお茶をゴクリと一口。

「はあー」

ついでに満足そうな溜め息もついてみたりする達彦。

その隣では香織がジッと食い入るように目の前で歌っているユウを見つめている。

その歌声は確かに男性とも女性とも聞き取れる声であった。

「なんか、変、じゃないかな？」

香織の口から意外な言葉が漏れる。

「まあ、しょうがないでしょう、性別がはっきりしていない事は、かなりの違和感がありますからねえ」

達彦はそう言って、またお茶を一口。

しかし、達彦の言葉は香織のそれとは違うらしく、小さく首を横に振った。

ふと、スピーカーから「ブツッ」という不快な音と共に曲が止まってしまった。

「あ、っ」

微かに小さい声がユウの口から漏れる。

その瞬間、一気にユウの表情から血の気が失せる。

「あっ、あのスママセン。機械のトラブルで音が止まってしまいました!! 復旧まで暫くお待ち下さい!!!」

司会者の分かり易すぎる程の動揺した声で、会場は騒然となる。

そして、舞台裏からはスタッフの声を殺した怒号が行き交う

そして、

「大変申し訳御座りませんでした、機械のトラブルの原因も判明しましたので、また最初からお願いし致します」

そんな司会者の声に、笑顔で答えるユウ。

そして、程なくして、また曲のイントロが流れ出した。

ユウは、また何事も無かったように歌い始めた。今度は何もトラブルは無かった。

歌い終わると小さく挨拶し、早々とステージ

# サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

から立ち去ってしまった。

「えーっと、ではこれから今度発売されたレピッシュの新曲について聞きたいんですが」

司会者がそう言ってステージの袖を覗くと、レピッシュと契約を結んでいるレコード会社のスタッフらしき男性が、ユウと何か打ち合わせをしていた。

ユウは二、三回頷くと司会者に向かって両手で小さく丸を作った。

「どうやらOK」という意味らしく、ユウはまたステージ上に戻ってきた。

ステージの真ん中まで来ると、観客に向かって軽く頭を下げる。

そして司会者が、いざインタビューしようとしてハンドマイクを口許へ持って行こうとした時。

司会者の居る方の近くの舞台袖からレコード会社のスタッフらしき男性がその司会者に一枚の紙を渡した。

その紙には既にインタビューの内容が書かれてあった。しかも、レコード会社代表取締役の名義が記載されている。

そして、巻末にはこう記載されていた。「レピッシュというユニットの存在意義を具現化する為の手段である為、ご協力御願ひします」

当然その紙の一番上には「社外秘」の印が押してあり、おいそれとアドリブを効かせる訳にもいかない。

「じゃ、じゃあ、えーっと」

司会者はさも、レピッシュの資料を身ながら質問をしているか如く、その原稿を読み上げていく。

その後のやりとりは、ごく当たり障りのない普通の応答が続いた。

「なんか、この会話 テレビに出ている時のとあまり変わりませんねえ」

正直、芸能関係には広く浅くあまり詳しくない達彦でも、その違和感を感じていた。

「やっぱり違う」

香織の言っていた言葉の意味を理解した達彦だった。

その後、インスタイベントでは既に普通になっている、アーティスト本人による手売りによる販売が行われた。

「先、いいよ」

達彦が、順番を香織に譲る。

「えっ いいよお」

そう言って、達彦の後ろに行こうとする香織。

「いいから、こっち」

達彦はそう言うと、香織の手首を掴むと、そのまま、香織を自分の前に押し出す。

「い、痛い〜」

「あ ごめん。大丈夫」

「思わず、自分が握った香織の手首を自分の目の前に持っていくとすると。」

「や、やだっば!!」

その達彦の手を振り解く。

「え あ、 ごめん」

「そうこうしているうちに香織の番になった。」

「あ あの 頑張ってください」

「まあ、何り来たりの言葉だが、今の香織にとっては精一杯なのだろう。」

それに気付いたのか、ユウは笑顔で答えて、香織を握手をする。

「なんだかんだ言っていた達彦も、やはり有名人の前では普通の激励ぐらいしか言えなかったのはやはり、子供なのだろう。」

しかし、

「覆ちゃんさ、これ渡すから今度メールしようよ」

その声は矢野達彦だった。

ユウの周囲にいるスタッフは最初は苦笑していたが、達彦の言動はだんだんエスカレートしていき、しまいにはスタッフがユウとの間に割り込むまでのなってしまうている。

「だから、オジサンには用はないよ」

しかし、そんなスタッフの意を介そうともせず、懲りずにユウにちょっかいを出す。

「いいや、面倒くさい」

「そう言うと、達彦はユウの唇を強引に。」

「!!」

そして、

「何をっ !!」

それはユウの声。

しかし、その声は先程のインタビューを受けていた時の声とは明らかに違っていた。

## 次回選択

ア:レピッシュ(ユウ)

イ:矢野達彦

ウ:久保田香織

その他

# サランの戦士 ~ Little Hero Paradise ~

マスター通信

そんな訳で第一回でございます。

色んな伏線がありますが、どう展開していく

かは 貴方次第です。

色んな意味で(笑)

担当 : 美神弘貴